

江戸時代を代表する豪商・鴻池家によって蒐集された美しき裂のかずかず。裂簞笥に納められ伝世した幻のコレクションがいま明らかになる！

名物裂の研究

めいぶつくれ
ひんかき
いづのらびげんらん
しふくごまぶくろ

鴻池家伝来の仕覆解袋

【編著】小笠原小枝
◎日本女子大学名誉教授

金襴・緞子・問道など、計135点に及ぶ作品の詳細な図版、調書と解説を完備。その魅力を存分に伝えるとともに、「名物裂」を舶載染織品として捉え、染織史に新たな知見を提示する挑戦の書！



推薦のことば

新たな見方を提示する 挑戦の書

三輪嘉六

◎元九州国立博物館長、文化財保存支援機構理事長

名物裂仕覆解袋は、これまでどちらかといえば好事家のものとみられがちであった。そんな傾向の中で、本書は随所に新しい見方を提示する。染織文化としての理念、対外交流との関わり、日本文化での位置づけ、そのあたりが詳細に整理されていることは大いに興味を惹く。また、これらは伝世品の代表的な遺品でもあるが、茶の湯を通じた文化力、伝統力の一つとして文化財的価値の再整理を行うなど、文化的情報に大きく寄与する内容になっている。

本書の性格として、図版の出来栄えは一つの生命線である。美麗な図、繊細な織や文様を分かりやすく見せる映像的な処理、あるいは3DCGの活用……。図版全般にわたって見ごたえするのは本書ならではの挑戦であろう。

執筆陣は、小笠原小枝氏をはじめとして染織文化の研究に実績を重ね、常に斯界に新しい刺激をもたらしてきた人達である。長く秘蔵であった鴻池家伝来の裂簞笥に納まった仕覆解袋を基本資料に、多角的な視点から名物裂を文化として論じたことは、本書の魅力を確実なものとし、併せて次世代に対し染織文化の新しい価値を喚起する役割を果たす一書となっている。

(産不同)

花兎[紺地雲兎文織分金欄]



刊行にあたって

織や文様を語る上で
逸することのできない
「名物裂」の実相を
明快に示すコレクション

小笠原小枝

◎日本女子大学名誉教授、東京国立博物館客員研究員

日本の染織史のなかの一角に「名物裂」と呼ばれる特別のジャンルがある。特に現存資料の少ない鎌倉から室町時代——いわゆる中世——の染織を語る上で逸することができない存在がこの「名物裂」である。もちろんこれらは本来日本のものではなく、主として中国から運ばれた元・明時代の舶載染織品である。しかしこれが日本近世の織物に与えた影響は大きく、友禅染のような染模様の世界は別にして、新しい織の世界はこうした外来の金欄や緞子を模すことから発展してきた。そしてその織や文様の一端は今でも私たちの周りに生きている。茶席で培われた「名物裂」に無関心でいられない理由はそこにある。

では正直なところ「名物裂とは何か?」と問われると、その返答に窮するのが常であった。

しかし、本書で紹介する鴻池家伝来の裂簞笥に納められた仕覆解袋は「名物裂」とは、名物茶入に付随する袋(仕覆)にはじまる」という言葉を明快に示している。

江戸時代を代表する豪商鴻池家の道具帳(元禄四年には袋の個々の名称が記されており、「名物裂」の成立過程

新たな名物裂の大集成を 推薦する

熊倉功夫

◎ 国立民族学博物館名誉教授、MIHOMUSEUM館長



今ここに、名物裂に関する詳細にして明快な、新知見に満ちた研究が大成されたことを喜びたい。裂の魅力にとりつかれる人は多い。人類にとって最も古い文明の一つである染織は、日々身にまとう衣服の素材であるだけに、千変万化の様相を見せてきた。

染織の諸相の中で、最も豪華にして繊細な織物が中国に誕生した。その貴重な裂を日本人の目で選択し、大切に保存し鑑賞する美の伝統が生まれた。名物裂の誕生である。

名物裂とは名物茶器の仕覆に選ばれた裂にはじまるという。十五世紀以来、日本独自の茶の湯文化の成立とともに、唐物を中心とした名物が尊重され十六世紀には名物記といわれる名物の目録が作成された。おそらく名物道具、ことに名物茶入には、それにふさわしい仕覆の裂が選ばれたことであろう。やがて江戸時代になると、名物道具といわれる名品は、徳川幕府の柳営御物をはじめとして大名の蔵に収まったが、そうした武家方の収蔵品に勝るとも劣らぬ名物の大蒐集をとげた町方の雄が鴻池家であった。

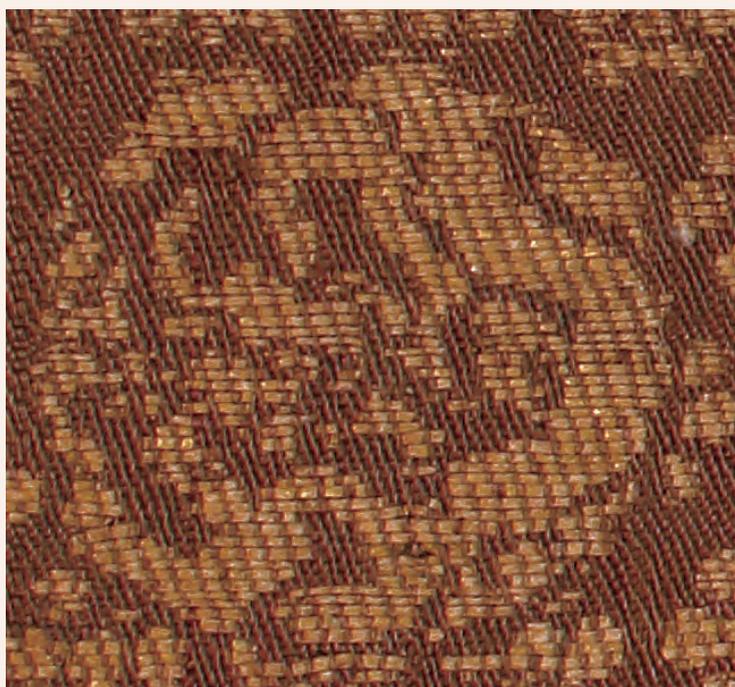
鴻池家の名物は、長い間、外部には秘して示されなかった。近代に至って多くの名物が新たな持ち主を得た中に、この貴重な裂簞笥もあった。鴻池家伝来の名物茶入がかつてまもっていた仕覆の名物裂がはじめて公開され、徹底した研究が発表されたのである。これは画期的なことである。

染織史研究の第一人者である小笠原小枝氏を中心に、三人の研究者が加わり、それぞれ渾身の力を振りしぼって進められた研究成果は、近年の中国はじめ中央アジアなどの発掘資料もふまえ、新知見に満ちている。しかも懇切丁寧で初心の者にもわかりやすい。また図版は美しく鮮明である。

茶の湯を学ぶ人には、なくてはならぬ一冊であるばかりか、裂を愛する人びとの座右に是非そなえていただきたい書物である。

を解く上でこれまでにはしばしば引用されてきたが、それらは残念ながら名称のみであり、裂の実態は不明のままであった。現在の裂簞笥には宝暦年間頃に整理され、出所履歴を示す「簞笥袋裂目録」も付されており、江戸中期における名物裂の実相を知る上でも、加賀前田家に伝来する名物裂を補って余りある資料的価値を備えている。本書では同コレクションの悉皆調査を行った調査とともに、一見しただけでは見過ごされる緻密な織の様子や文様の面白さを伝え、また3DCGによって解袋から仕覆の形を再現する試みも加え、見て楽しい書籍を提供できるように心掛けた。

また、近年の中国や日本での研究成果を踏まえ、金襴や緞子の歴史、また文様の比較研究のもとに、新しく作品の時代設定をも試みている。この書が今後の名物裂研究の一助となれば望外の幸せである。



雲山【紫地七曜團龍文金襴】部分(団龍文)

金襴



●作品全図
主に、右身頃・左身頃・底部が一揃い伝わる仕覆の解袋

014

火燈口「紺地火燈口龍文金地金襴」

●明 十五世紀

かとうぐち
こんじかとうぐちりゅうもんかなじきんらん

●見出し
名称、染織名称の順に記載。製作地と時代を付記



部分
うら



部分



拡大

す箇所を
「拡大」



【法量】
(右)縦10×横10.5cm
(左)縦10×横10.5cm
底径4cm
文丈7.2cm、窠間幅3.5cm
一文様縦2.6×横2.3cm
【素材】絹、金糸(平箔糸)
【地組織】平地・三枚綾地(入子菱地紋)
【糸色】経=縹、緯=縹
【糸込】経40本、緯=19-20越
【糸撚り】経=甘撚りS、緯=無撚り
【文緯】平箔糸(箔良残)、全越、別擲、全通
【目録・墨紙】
文政5年(1822)目録「貳拾三 一 火燈口 龍 萌黄」/
墨紙表墨書「モエキ 火燈口 龍」

◆萌黄色の火燈口金襴と伝わるが、地色は縹色を呈している。金地と地色の縹色が相俟って萌黄地にみえたものか。〇と〇と同様に入子菱地紋を背景にし、躍動する龍を火燈口形に納め、互の目に並べて表した金地金襴。龍の表現も非常に似ているがよく見ると細部が異なっている。

●解説
茶席に関する文献資料を挙げつつ作品の名称や特徴、また他の類似品について解説

●調書
各裂の詳細な調書

●仕覆の再現イメージ
解袋から類推される仕覆のすがたを3DCGにて再現

「龍」「兔」「鳳凰」「飛雲・連雲」「唐草」など さまざまな文様が登場する名物裂—— 中国の出土品などと比較検討し、 文様や織のルーツを考察するテーマ解説

テーマ解説
頁見本

図版

円龍・升龍・角龍 龍文の系譜

●部分図
よく特徴を表す箇所
「文様」「部分」「拡大」
として提示



図1-1 西夏王供養図
敦煌莫高窟第109窟、12世紀

名物古金襴には龍文が多い。しかしどうしても小文様であることと、経年劣化による糸のやつれや箔糸の摩滅から、その形状を明確に捉えることはなかなか難しい。しかし他の染織品や工芸品に見られる作例において龍の頭・胴・四肢・尾の位置関係を知ると、金襴のおぼろげな姿もより判然とする。そこで名物裂に近い年代の他の例をとりあげながら、金襴の龍文を一瞥してみる。

龍文を円形に纏めた意匠が染織文様として見られるのは、敦煌壁画のなかでも五代頃とされる莫高窟第一〇九窟西夏王供養図の衣(図1)においてである。そして近年になって内モンゴルや中央アジアから遼・元代の刺繍や織金(金襴)の円龍文が多く発見されてきている。

なかでも慶州白塔址発見の遼時代の羅地刺繍(図2)や金あるいは元とされる中央アジア発見の織金(図3・図4)の他、日本でも鎌倉円覚寺や京都天龍寺伝来の九条袈裟に円龍文が認められる作例がある。特にこの二肩は夢窓疎石(二七五―一三五)の料とも推察されるものである。

以上の内、図1と図2は文様形式が穏やかで、図3・図4の織金とは趣が異なるものの、いずれも龍の横顔を円の中央に据え、身体は下から上にあがって頭上に尾がきている。

本コレクション中では、上柳(図5)、雲山(図6)、筒井(図7)にそうした団

龍の肢体が見られる。特に図5と図6の金襴は朱と暗紫色の地色の違いこそあれ、いずれも団龍文のまわりを七曜花文で埋めたもの、図7は六つ花形の形状の内に龍文を、その周りに網状の地文様を織り出し金地金襴としたものである。

次に一般に「升龍」と呼ばれる龍文金襴であるが、このコレクションにあるそれは、図8・図9を見ても分かるように、いわゆる角龍と呼ばれる全くの方形のなかに納められた龍文とは趣を異にしている。一般に角龍と称される金襴は、色違いの作例が残っているが、ここにある一群の龍文は、こうした形式化が進む以前の姿であると思われる、爪形(火燈形)にせよ菱形にせよ、龍の動きそのものから、その形が作られている。

図8と図9は、共に摺れて一見文様が判然としないが、龍文の姿が最も良く残っている部分から、横向きの頭を上げ、背を大きく湾曲させて両手を突き出し、両足を踏ん張った姿が浮かび上がる。その形状はちょうど図10の青磁貼花雲龍文盤に見る龍文を基本としたもので、元代の他の工芸品にも共通に見られる龍文の形状である。

またこの形状を菱形に変形させると図11のような姿になり、火燈形のなかに入れ込めば図12・図13の火燈龍文金地金襴のような意匠になる。特に図13の勇ましい龍文の姿は内モンゴル洞元・至正二十二年(一三六二)の文書と共に発見された緞子の龍文の流れをくむように見える。図14の団龍になると明代の典型的な頭の大きい龍文になっている。



図4 緑地団龍文織金
元 13-14世紀
クレーブランド美術館蔵



図3 団龍文織金
金~元 12-13世紀
メトロポリタン美術館蔵



図2 慶州白塔出土、羅地龍文刺繍、遼 11-12世紀
巴林右旗博物館蔵



図1-2 同 部分

3DCGによる仕覆の再現



左身頃



右身頃



底部

仕覆の解袋は一般に右身頃・左身頃・底部から構成されている。



側面



正面

解袋の現状の写真をもとに作成した再現イメージと、多角的視点から見たそのバリエーション。

◆本書では、鴻池家伝来の解袋の現状写真を掲載するとともに、かつて仕覆に仕立てられていた当時のイメージを3DCGによって再現する。
 ◆3DCGによって復元した仕覆は、正面・側面・底部など多角的な視点から見ることが可能であり、緒の組み紐のイメージや帛面の微妙な陰影などの表現も試みている。

目次

鴻池家伝来の名物裂解袋——小笠原小枝

金欄

金欄のさきがけ

葡萄銀欄「紅地華盤銀珠文金銀欄」

金欄における織と用語

興福寺銀欄とマカラ（摩羯）文様

興福寺「紫地鳳文銀欄」

大燈金欄 靈芝小花文様の系譜

大燈「朱地靈芝小花文金欄」／長楽寺「朱地靈芝流雲文金欄」ほか

円龍・升龍・角龍 龍文の系譜

上柳「朱地七曜団龍文金欄」／雲山「紫地七曜団龍文金欄」／東大寺裂「紫地角龍文金欄」

永観堂「白地角龍文金欄」／剣先「紺地毘沙門亀甲龍文金欄」ほか

雲麒麟・花兔金欄 ジェイランの系譜

花麒麟「縹地造土雲麒麟文金欄」／花兔「萌黄地雲麒麟文金欄」／紹知「白地花兔文金欄」ほか

橘屋金欄（二人静金欄） 鳳凰円文の系譜

橘屋（二人静）「紫地向鳳文金欄」

鶏頭金欄 造土文様の系譜

大鶏頭「蘇芳地花卉文金欄」／鶏頭「朱地花卉文金欄」／鶏頭「紅朱地花卉文金欄」／藤言「萌黄地造土文銀欄」ほか

富田金欄 飛雲・連雲の系譜

富田「蘇芳地連雲宝尽文金欄」／茶地古金欄「朱地雲鳳文金欄」／滑銭「紺地雲牡丹唐草文金欄」／一房毛「白地靈芝蔓文金欄」ほか

各種の金欄

蜀金「縹地七宝菱小花文金地金欄」／米市「紫地輪蓮花文金欄」／畠山「浅葱地重銭文金銀欄」

／金剛「縹織地入子菱文金欄」／大蔵錦「石畳地鳳凰文錦」／金地宝珠（千体仏）「紺地宝珠蓮花文金地金欄」ほか

花唐草文様

綾地小蔓「白地小蔓文金欄」／金地金欄「白地二重蔓大牡丹文金地金欄」／中牡丹「白地二重蔓中牡丹文金欄」／高台寺「紺地二重蔓牡丹唐草文金欄」／本願寺「白地二重蔓中牡丹唐草文金欄」ほか

安楽庵手

安楽庵 建仁寺「丹地大花唐草文金欄」／安楽庵 雲雀「紺地鳥菱連雲文金欄」／安楽庵「紺地宝尽文金地金欄」／安楽庵 中形雲「浅黄地雲宝尽文金欄」ほか

安楽庵 建仁寺「丹地大花唐草文金欄」／安楽庵 雲雀「紺地鳥菱連雲文金欄」／安楽庵「紺地宝尽文金地金欄」／安楽庵 中形雲「浅黄地雲宝尽文金欄」ほか

◆茶入の仕覆は立体裁断の要領で採寸され高さ、底部の直径、胴径、底部から最大胴径までの角度などと、身頃と丸底の型紙がつくられた後、素材(表地)が裁断される。また同時に裏地も裁断され、仕立てる際には表地と裏地の間に真綿を薄く入れることが多い。仕覆は個々の茶入の寸法を測って誂える、いわゆるオーダーメイドである。

◆左に掲載する「仕覆形状の二種の再現例」のように、胴径の変化や立ち上がり、緒つがりの絞り具合により仕覆の形状はさまざまに想定することができ、また緒つがりの色・形状などは未詳である。従って本書に掲載した復元図は、あくまで類推可能な一つのイメージとして参照されたい。



解袋の現状

仕覆形状の二種の再現例



上部から

燃金

寄金「金地宝珠形及獸文燃金欄」／標地寄金「挽家袋」

モール

白地金毛織「白地花卉文金銀モール」／後西院裂「白地花卉文銀モール」／名物裂ツギツギ「名物金欄縫合」／和久田糸入「白地青海波地紋蓮池水禽文縫取織」ほか

緞子

緞子のさきがけ

名物緞子における織と用語

白極「濃紺地及鳥丸分銅繫文緞子」／珠光「標地龍牡丹唐草文緞子」／宗悟「標地龍雲唐草文緞子」／紹鷗「紺地龍唐草文緞子」／有染「紺地鶴小網文緞子」／亡羊「紺地鳳凰唐草文緞子」／道元「紺地虫入花唐草文緞子」／花色(五毒)「花色地吉祥五毒文緞子」ほか

名物裂における真贋「本歌」と「写し」、そして余戯

下妻緞子写「双鳥丸分銅繫文緞子」／定家文様緞子写「花唐草文緞子」

間道

間道

鎌倉間道「濃紺白淡紅大小豎縞織」／弥三右衛門間道「赤茶地紺白縞格子織」／中尾間道「濃紺白茶小格子織」／望月間道「茶白茶縞格子縞格子織」／船越間道「真田金糸入八彩細縞織」／紹鷗間道「紺白小千鳥格子織」／古渡・占城(中裏袋)「緞入濃紺標白大小縞織」ほか

雑載

黄緞(黄純)

茶地黄純「小牡丹唐草黄純銀欄」／花色地黄純大内桐(標地桐文銀欄)

縞珍(朱珍)

宝尺縞珍「黄地宝散栗鼠文銀欄」／縞珍「十二支文錦」

サラサ(更紗)

更紗(挽家袋)「白地火焰形花文様ゴマ手更紗」／金更紗「萌黄地花葉文様金更紗」

仕覆の影の主役かいき

紋海黄牡丹「濃紺牡丹唐草文平地綾」／紋海黄笹牡丹「濃萌黄笹牡丹唐草文平地綾」
紋海黄紹鷗「鼠笹牡丹唐草文平地綾」ほか

論考・資料

名物裂の研究 鴻池家伝来の仕覆解袋をめぐる——小笠原小枝

名物裂の名称 増加の変遷とその要因——佐藤留実

利休所持「備前茶入」布袋の白地金欄考——吉岡明美

鴻池家の茶と道具蒐集 名物裂の蒐集と伝来に注目して——中野朋子

鴻池家伝来名物裂篋筒概要及び目録内容

「名物裂」関連資料

名称及び英訳一覧

主要参考文献

本書の特徴

●大阪の豪商で、江戸時代には日本最大の財閥に発展した鴻池家が蒐集した名物裂を始めて本格的に紹介。裂箆に大切に収蔵され伝世した第一級のコレクションである。本書では、同コレクションの悉皆調査を行い、ほぼすべての名物裂の図版と調査記録、解説を収録する。

●鴻池家伝来の名物裂には、出所を歴を示す「箆筒袋裂目録」が付されており、本書でもカラー収録する。当時の名称も照合でき、江戸中期における名物裂の実相を知ろうえでも、名物裂研究の基礎資料として著名な加賀前田家伝来のものを補う重要な資料である。

●さらに、染織研究の第一人者である小笠原小枝氏により、多様なテーマ解説を加える。テーマ解説では、名物裂を舶載の染織品としての視点から捉え、中国の類似する作品との比較検討を行い、文様や織のルーツを探る。また巻末には計四本の関連する書き下ろし論文を所収。

●3DCGを駆使し、解袋の写真から改めて仕覆の形を再現するなど、美しいカラー図版を満載。染織の研究者だけでなく、茶道文化や文様の成り立ちに興味のある向きなど、幅広い分野の愛好者へお薦め。

本書をおすすめします

- ◇染織史・服飾史の研究者、服飾デザイナー
- ◇茶道史・茶道文化ほか、日本文化史の研究者・愛好家
- ◇文学部(日本文化)・美術学部(染織・デザイン)・生活学部(服飾)・工学部(繊維学)などの学部図書館、大学図書館
- ◇公共図書館、美術館、博物館 ほか

編著者略歴

小笠原小枝

◆おがさわら・さえ
一九四二年生まれ。日本女子大学名誉教授、東京国立博物館名誉各員研究員。専門は日本・東洋染織の比較研究。

主な著書に『日本の美術』『更紗』(一九八〇年)『金襴』(一九八四年)『染織(中世編)』(一九八八年)『緋』(一九九二年)以上至文堂、『舶載の染織(中央公論社、一九八三年)、『染と織の鑑賞基礎知識』(至文堂、一九九八年)、『ジャワ更紗——いまに生きる伝統』(共著、小学館、一九九九年)、『別冊太陽 更紗』(監修、平凡社、二〇〇五年)など多数。



名物裂の研究

鴻池家伝来の仕覆解袋

A4変型判(225 × 286 mm) / 260ページ / 上製・布クロス装・函入 / 全1巻・オールカラー
定価: 本体30,000円+税
ISBN: 978-4-336-05845-4

編著——小笠原小枝 日本女子大学名誉教授
著——佐藤留実 五島美術館主任学芸員
執筆——吉岡明美 元根津美術館学芸員
中野朋子 大阪歴史博物館学芸員



鎌倉間道 雪之下 [藤脂紺白淡紅大小縞格子浮織]

国書刊行会 〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15 TEL: 03-5970-7421 FAX: 03-5970-7427
http://www.kokusho.co.jp E-mail: info@kokusho.co.jp

取扱店

申込書

ご記入後、お近くの書店へお持ち下さい。

『名物裂の研究 鴻池家伝来の仕覆解袋』

冊数

定価=本体30,000円+税 国書刊行会

お名前

お電話

ご住所